

# 久留米藩の尚武の気風 —背景と由来—

大坪 壽\*

## The Sprit of Training Budo in Kurume-Han — Background and Source —

Hisasi OTSUBO\*

### Abstract

The Chikugo region which has developed around Kurume is well known as a region of the martial arts. It has been said that there used to be many calligraphers and scholars in the Chikuzen region, politicians and lawyers in the Hizen region, and martial artists in the Chikugo region. It can be said that the spirit of martial arts training in Chikugo region owes a lot to its training system in the Arima era.

The purpose of this study is to examine the background and the source of the spirit of martial arts training in Kurume-han. This Study is based on the collection of books of the Tsuruku family and books published around Kurume-city.

KEY WORDS : 久留米藩, 尚武の気風, 背景

### はじめに

久留米を中心とした筑後地区は、武道が盛んな土地柄として知られている。久留米藩に「筑前書、肥前公事、筑後武」と言う俗諺がある。すなわち、このことは筑前には書家や学者、肥前には政治家や法律家が多く、その上弁論にも長じているという、筑後には兵学武芸が盛んであると伝えられていることを示している。明治以後今日までその気風は脈々として伝えられている。この尚武の気風は久留米藩の武芸を語る時良く述べられているが<sup>2)9)</sup>、藩政時代の武道教育に負うところが大きい<sup>8)</sup>。しかし、その背景、由来については十分述べられてはいない<sup>10)</sup>。

本研究では、筑後地区の尚武の気風を培った背景と俗諺の由来を、福岡県三潞郡西牟田郷土史家鶴久二郎氏が収集した文書（以下鶴久家文書）や

久留米市で出版された書籍を中心に考察し報告するものである。

### 1 尚武の気風の背景

#### (1) 風土的に見た背景

人間をつくるのには社会的要因が重要である。その人を取り巻く環境、生活様式や文化などが重要な要因となる。特に人間の移動や文化の交流が少なかった時代ではなおさらである。その中で育った人間が同じような人間性を持ち、行動傾向を持ち、気風を持つのは自然の理である。

阿蘇外輪山に源を発した筑紫次郎と言われる九州一の河川筑後川は、大分県日田市夜明を過ぎると堆積作用をはじめ、中・下流に広大で肥沃な穀倉地帯である筑紫平野を形成する。筑紫平野には

\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

筑後川を境に筑後平野と佐賀平野に分けられる。藩政末期の例でも、5年に1回筑後川の氾濫が起っている。そのたびに肥沃な土壌をもたらし、流域の住民は水と闘いながら、豊かな農作物を産した。筑後川は恵み深い母なる川である。東西に連なる耳納山地は、北斜面が急な断層崖となっており傾動地塊として知られおり、南斜面はなだらかに平地に接している。その山地の西の端が高良山(312m)である。

このような典型的な農耕従事の地理的環境の中で育った筑後人は戦国時代においても武士も農耕に従事しており<sup>12)</sup>、農耕民族特有の気風を持つのは不思議ではない。その気風は質直、温厚、保守的である。これは弱肉強食、下克上の戦国時代の3つの事象によっても証明できる。1つは菊池、少弐、大友、大内、龍造寺、島津の大勢力から国内を侵略された筑後衆は、これら支配者のため多くの血と汗を流してきた。自らの意志で他国を侵略した経験を持たない筑後人は、その大らかな気風と天恵の国土を征服者に利用された。また、乱世にあっては、小国の領主は独立して自国を経営、維持することが困難であった。弱い者は弱い者なりに知恵を働かせて生き抜き、滅亡をまぬがねばならなかった。そのため、小国は大国の傘下に入って所領の安堵を取り付け、あるいは小国同志が盟約を取り交わして団結して国家の防衛につとめるのが世の常である。天正6年(1578)耳川の戦いで大友氏が島津氏に敗れた後、かわって急速に勢力を伸ばしたのは龍造寺氏であったのに、筑後人は古い土地柄のせいが大友氏から離れられなかった。さらに、太閤秀吉の九州平定後、筑後国人の中からひとりの大名も出なかったことから、筑後人の気風が知られる。

## (2) 歴史的に見た背景

### ① 高良山・高良神社

前述したように、耳納山地の北斜面は急な断層崖で天然の要害となっており、高良山はその西端に位置し筑後国の交通および戦略の要衝であり、筑後川水運に大きな影響し「高良山を制する者は

筑後を制す<sup>12)</sup>」と言われている。歴史的にみても筑後を語る時に高良山抜きには語るができない。高良山に鎮座する高良玉垂命神社は筑後一の宮として古くから筑後人の信仰の中心であった。延暦14年(795)初めて従五位下の神階を授けられたが、のち100年間昇叙を続け、寛平9年(897)ついに正一位に昇った。延喜式内の名神であり、寛仁元年(1017)一代一度の奉幣にあずかっている。宗教的権威と荘園支配による世俗的権威を合わせ持った高良山の座主・大祝・大宮司は豪族と匹敵するほどの軍事力を持っており、神仏を背景とする勢力は強力であり、最盛期には千名の僧兵がいたと言われている。すなわち高良山の地理的優位性と高良神社を味方に付けることが筑後を制することになるのである。

以下述べるように、高良山に居を定めたり、布陣あるいは本陣を置いた歴史から、上述した内容を証明することができ、また常に筑後の国が戦場となったのである。

3世紀における女王卑弥呼の国「邪馬台国」の所在をめぐって、古くから諸説があるが、九州説の中にこの高良山の麓久留米・御井説や、後の筑後国府が同じく高良山の麓に設置されたことから、古くから水陸の要地であったことがうかがえる。

また、筑紫の国造磐井の反乱は、6世紀前後における地方豪族の反乱としては最大で最後の反乱であり、御井郡における戦鬪で斬られたと言われており、高良山の麓御井町に磐井の遺蹟と伝えられる磐井の清水、岩井川(磐井川)の名称が残っている。

高良山の中腹を取り巻くように切石の列石が続いている。国指定史跡の高良山神籠石であるが、これは城塞施設であり、築造の時期は明らかではないが、6世紀後半から7世紀初頭の対韓緊張の時期とする説が有力である。

南北朝時代になると、延元元年(1336)菊池武敏高良山に布陣し、2年後菊池武重は高良山で大友氏時と戦った。天正元年(1346)一色範氏が高良山に布陣し菊池と戦った。征西将軍懐良親王方軍が高良山に布陣し、大友・少弐等の幕府軍と筑

後川北岸の小郡野・大保原・山隈原一帯で戦い、双方で約2万5千人と言われる死傷者をだす大激戦があった。この戦いは正平14年(1359)で大原合戦と呼ばれている。

この頃以来、高良山を含む耳納山中には天然の要害を使い多くの城砦が築かれ、丹波・草野・門注所・町野・星野等の諸勢力が割拠していた。

永禄12年(1569)大友宗麟は龍造寺隆信を討つために高良山に陣を進め、高良山の支峰吉見嶽に本陣を置いた、後和議をした。さらに、翌年、再び龍造寺討伐の軍を起し高良山に本陣を置いた。

天正10年(1582)佐賀の龍造寺政家は、上妻郡木屋村の猫尾城主黒木兵庫頭家永を攻めるため、高良山に陣を進めた。

天正14年(1586)九州統一の機会を狙っていた島津義久は高良山を攻め、ここを指揮所として海陸から集まってくる諸勢の到着を待った。

天正15年(1587)豊臣秀吉は島津征討のため全国24州から動員した総勢25万という大軍をもって九州に入り、4月11日高良山に本陣を置き、支峰吉見嶽で諸将を引見した。

背景に筑後の信仰の中心である高良神社を持つこの伝統は明治以後も残っており、明治30年(1897)歩兵48連隊が福岡から国分村に移され、軍は高良神社を守護神としてまつりあげた。昭和15年(1940)本坂下まで自動車道が建設され、それから数年間に渡って百万を越す人々が戦勝を祈願した。高良山には戦勝を願う旗が林立し空前の賑わいを見せたと伝えられている。

このように高良山の地理的条件の優位性と高良神社を味方に付けるため、あるいは味方に付けて戦いが行なわれ、おのずから戦場は筑後国であった。

## ② 戦国期の筑後衆の戦闘ぶりと犠牲

筑後の諸族は大別すると、宇都宮・少弐・大蔵・清原・調・松浦・三善など名流の子孫が多かったが、ほとんど弱小領主たちで国内各地に分立割拠していた。それぞれの隣境までわずかに2、3里(約8～12km)しか離れていないため、互い

に牽制しあって、自領を維持することに汲々としていたから大勢力に育たなかった。そのため早くから他国の大勢力の侵略を許すことになった。

戦国争乱の中で、菊池・少弐・大友・大内・龍造寺・島津の大勢力から国内を侵略されてきた筑後衆は出陣を強いられ、これら支配者のために多くの血と汗を流した。豊後・筑後守護職を世襲するようになった大友氏は領国中どこで戦いが始まっても、筑後衆に出兵を命じ、筑前・肥前・肥後はおろか豊前・日向まで従軍させられた。そして激戦の中で死んでいく者も多かった。勝ち戦なら恩賞にもあずかろうが、負け戦の時はそれもなく、犬死同様の惨めさを味合わねばならなかった。恩賞にあずかる場合も、太刀一振りか鎧一領もらえば良い方で、軍忠抜群を賞するという大友感状の紙きれ一枚で終わることが一般的であった。

この戦国期の筑後衆の戦闘ぶりと使われた方の典型的な例がある。永禄10年(1567)の休松合戦である。大友宗麟の治政に不満を持つ高橋鑑種は毛利氏に通じて宝満山で叛旗を翻した。これに呼応して秋月種実も6千の軍勢を集め旗揚げした。戸次・臼杵・吉弘の大友三将は、豊後・筑後・筑前・豊前の2万の軍勢で秋月討伐に向かいこれを破ったが、種実は古処山に入りなお抵抗した。この時毛利の大軍が押し寄せる噂が広がり、豊筑の諸将は自領に引き揚げてしまった。大友軍に従ったのは筑後の将兵であった。大友軍の撤退を察知した秋月種実は4千の兵で古処山を駆け下り、休松の本陣はじめ大友の各陣を強襲した。大友軍の主力が豊後に向かって帰国するのを、筑後衆は大友軍の矢表にたって敗走する友軍を支え戦ったので大きな犠牲を払わされた。多くの人命を失った上に軍費まで自弁でまかなわされたため、疲弊が増大したこともあったようである。

以上述べたように、筑後衆は必死で自分たちが居住する国を守って戦った。敵に勝つことによってのみ自分自身・家族・家・国とすべての生活が保障された。そのために、筑後衆は兵学・武芸に励む必要があったものと思われる。

## 2 尚武の気風の確立

### (1) 歴代藩主の武芸奨励

藩祖有馬豊氏は武芸を貴び、歴代範主が藩祖にならぬ一流の武芸家を招聘し、武芸を奨励した。

2代忠頼の時、弓術では西沢左近右衛門、同弥右衛門、伴弥五右衛門、同六郎左衛門、杉六右衛門などがあり、馬術では中村斎助がある。

兵学では3代頼利の時長沼宗敬を招し、その後宮川忍斎が跡を継いだ。越後流のほか甲州流、山鹿流、北条流が伝えられた。

剣術では、6代則維の時真里谷円四郎義旭本藩に遊事す<sup>3)</sup>とあり、これが久留米藩における剣客聘用の始めであり、加藤田神陰流の祖流である。加藤田新八は享保元年(1716)招聘され剣術師範役となった。浅山一伝流、後の津田一伝流は津田一左衛門教正が藩の師範役のなったのが始めである。直心影流は今井湛斎が31歳の時帰藩して師範役となったのが始めである。年齢からいって、寛政12年(1800)8代頼貴の頃と思われる。槍術では、6代則維の時、妙見自得流の井上久豊を招聘したのが始めで、正徳年間(1711～1715)宝蔵院流の森尚友が藩に仕えた。

柔術師範招聘の最初は、6代則維の正徳年間(1711～1715)の良移心頭流森八郎右衛門である。関口流は享保年間(1716～1740)に渋川種親が招聘された。扱心一流は宝暦年間(1750～1763)犬上郡兵衛永保が招聘され伝えた。

砲術では、7代頼僮の時荻野流入江平馬、長野機蔵、磯流浜田郷右衛門、若松流平山正常等を招聘した

以上述べたように歴代藩主は師範役を録して盛んに武芸を奨励した。天明2年(1782)11月18日(天明3年説あり)家中武芸稽古所を城内に建て、藩士の教育をし振興を図った。

### (2) 講武榭における武道教育・奨励

安政6年(1859)明善堂が改築されるとともに万延元年(1860)従来の学制を改革し、前述の武

芸稽古所を併合して武館として「講武榭」と名付けられた。改築した明善堂を文館とし、武館と併せて「学館」と称して文武両修の藩校として明治4年(1871)の廃藩置県まで続いた。学館の指導組織は、学館総督、学館御用掛(慶応2年(1866)学館奉行に改称<sup>1)</sup>)、御用席詰、肝煎、学館御目付、各科に師範役(明治3年(1870)指南役に改称<sup>1)</sup>)を置き、槍術・剣術・大小銃・柔道・弓術・兵法・居合を指導した。

指南役は各自に稽古所を設けて指南に従事し、講武榭会日にはそれぞれ門弟を率いて修行させた。会日は、「一ノ日居合、久保直衛跡門弟、井上栄門弟、三ノ日剣術、津田一左衛門門弟、今井静左衛門門弟、加藤田平八郎門弟、四ノ日射術、松岡友紀跡門弟、山村唯八郎門弟、吉田猪熊門弟、宮部三左衛門門弟、五ノ日柔術、赤松要助門弟、長沢小四郎門弟、渡辺七太夫門弟、下坂五郎兵衛門弟、森弥兵衛門弟、六ノ日槍術、井上弥左衛門門弟、古川小平太門弟、深井半左衛門門弟、森弥平衛門弟<sup>1)</sup>」、「九月二十三日剣術、十一月五日柔術、十一月七日槍術<sup>1)</sup>」のように種目ごとに日を決めて行われていた。

定会としては1年1回冬期に大会があり、藩主または家老職が臨席検閲し、優勝者には恩賞を与えた。また毎年数回の試合があり、家老以下の臨席し奨励した。なお各科の修行には一定の制を設け、その技が上達するに及んで等級を分け、「初級を目録、二級を免許、三級を印可<sup>6)</sup>」と称して、その師家より各級伝統の巻物一軸を賞した。明治3年(1870)の「講武榭紀則<sup>1)</sup>」によれば、試業は試合によって行われ、等級は「是迄の目録を初級後目録を二級免許を三級印可を等外と推定候事<sup>1)</sup>」と改正された。指導はまず手数(現在の基本と形)、長すれば試合で行われた。

また久留米藩饗年表<sup>1)</sup>によれば、寛政11年(1799)1月21日武芸出精者に褒賞、文化5年(1808)4月27日文武出精の者に褒賞(学問出精褒美3人、褒詞16人、無格同1人武芸出精褒美31人、褒詞64人、無格陪臣45人)、文化10年(1813)9月5日藩主頼徳明善堂に臨学、文化15年(1818)1月11日藩主明善堂に臨学、文政9年

1月23日藩主明善堂に臨学、文政11年（1828）1月15日明善堂生徒の出席皆勤者に褒美として書籍を下賜、天保元年（1830）1月22日藩主明善堂生徒を激励、2月22日文武出精の者に褒美、天保7年（1836）2月19日明善堂生徒を藩主激励、天保14年（1843）藩主明善堂に臨学、慶応2年（1866）1月12日藩主明善堂に臨学、慶応3年（1867）藩主明善堂に臨学、慶応4年（1868）藩主明善堂に臨学と記されている。

また久留米藩剣術師範、加藤田神陰流第4代の加藤田平八郎が記した『加藤田日記』にも、各武術上覧・内覧・見分、文武褒美や万延2年（1861）江戸屋敷において諸藩より150人を集め開催された江戸剣術大会の記述なども見ることができる<sup>4)</sup>。

以上述べたように、直接的な武道奨励のほか、文館である明善堂への藩主の臨学であっても、文武両修の藩校であるので、当然武芸の稽古にも熱が入ったものと思われる。例えば、文化5年（1808）の文武出精者の褒賞の人数を見てもいかに武芸が盛んに行われていたか分かる。久留米藩における熱心な武道教育と藩主や家老等の奨励をうかがうことができる。

### (3) 明治大正期の久留米の武道

明治34年（1901）渡辺昇が武徳会奨励のため久留米を訪れ、演武大会で演説した一説に「唯其の土地の武術家のみで、此位の盛況を見るのは、先づ他には比類のない所である。唯に撃剣柔道ばかりでなく槍術に於て37人の多きを見、馬術に於いて25騎の花形乗をこの地に於て見るが如き、到底何れの地に於ても見るを得難きところである<sup>5)</sup>」と述べ、当時の久留米の武道がいかに盛況であったかが表れている。

剣道においては、明治28年（1895）大日本武徳会精練証受有者の第1回に、松崎浪四郎（加藤田新陰流）、梅崎弥一郎（加藤田神陰流）、第3回（明治30年）に浅野一摩（津田一伝流）、第4回（明治32年）に津田一敬（津田一伝流）、第7回（明治35年）に武藤源八（津田一伝流）を認めることができる<sup>7)</sup>。

大日本武徳会剣道範士には、明治42年（1909）前述の梅崎弥一郎、大正7年（1918）同じく浅野一摩、大正10年（1921）に宗重遠（津田一伝流）の名を認めることができる<sup>7)</sup>。その中で、松崎浪四郎の日本剣槍柔道永続社や大日本武徳会の設立、天覧試合等における活躍については園田徳太郎が詳しく述べている<sup>9)</sup>。

柔道では、警視庁から明治15年（1882）良移心頭流の師範下坂才蔵に、初代柔道師範（当時世話掛）としての招聘があったが、赴任できなかったので久富鉄太郎（関口流）、仲段蔵（関口新々流）、上原庄吾（良移心頭流）、中村半助（良移心頭流）の4名が推薦され採用された<sup>2)</sup>。地方の一都市から同時に4名の柔道師範の採用は、いかに久留米の柔道が隆盛であったかを示すものである。

以上述べたように、明治・大正期になっても筑後人の気風によるものか、藩政時代の武道奨励が色濃く残されており、全国的に見ても、柔・剣道では特に顕著である。またその他の武道においても、渡辺昇の演説の一説通り、非常に盛んであった。

## おわりに

尚武の気風の背景と由来を考察してきたが、久留米を中心とした筑後地区は、筑後川が運ぶ肥沃な土壌による穀倉地帯であり、その南には天然の要害となる耳納山地を擁している。交通・戦略の要衝であり、古くからの中心地であった。恵まれた自然環境の中で育った筑後人は、農耕民族特有の質直・温厚・保守的な気風を育み、自らの意志で他国を侵略した経験をもたず、その気風と天恵の国土を征服者に利用された。その中で、居住する国が戦場となり、あるいは他国への出陣を強いられた筑後人は、必死で自国を守って戦った。敵に勝つことによつてのみ、自分自身・家族・家・国と生活が保障された。そのため、兵学・武芸の鍛錬が必要であり、尚武の気風の背景となったものと考えられる。

さらに、江戸時代の有馬氏による藩政時代になり、藩祖豊氏はじめ歴代藩主が武芸を奨励し、一流の武芸家を招聘し、講武樹における武道教育を

奨励したため、尚武の気風が確立した。明治初期の伝統文化にとって厳しい時代を経た後の、柔道における久留米から中村半助はじめ4名の警視庁柔道師範（当時世話掛）採用、剣道における松崎浪四郎の活躍や大日本武徳会精練証・剣道範士受有者の名簿、また渡辺昇の演説の一説のよっても、久留米藩の尚武の気風の高さが証明でき、前述した俗諺が伝えられたものと思われる。

昭和62年に制定された「武道憲章」の一文に、武道は日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て発展した伝統文化であると述べられているように、久留米を中心とした筑後地区は今日まで武道が盛んな土地柄として、尚武の気風が受け継がれている。

## 参考・引用文献

- 1) 著者不明：講武榭御用家業雜記，年代は元和2年（1665）から明治5年（1872）にわたって書かれている，鶴久家文書
- 2) 石橋和男：良移心頭流中村半助手帖，石橋大和，久留米，pp.10-11, p.120.
- 3) 加藤田平八郎：師系集伝，1843，鶴久家文書
- 4) 加藤田平八郎：加藤田日記，久留米郷土研究会，1979，pp.2-140.
- 5) 久留米市役所：久留米市誌 中編，久留米市役所，久留米，1933，p.6.
- 6) 久留米市役所：久留米市誌 中編，名著出版，東京，1972，p.4.
- 7) 中村民雄：史料近代剣道史，島津書房，東京，1989，pp.327-28, p.330.
- 8) 大坪壽：久留米藩における武道教育－講武榭と加藤田神陰流－，鹿屋体育大学研究紀要，第11号，1994，pp.1-7.
- 9) 園田徳太郎：剣士松崎浪四郎伝，久留米図書館友の会，久留米，1957，p.2, p.327.
- 10) 園田徳太郎は、「尚武の気風などの由来はどうかなど、種々疑問は起こるが、今はむずかしいことは差置いて」（園田徳太郎，前掲書，p.6）と触れておらず，石橋和男は、「当藩主の裕福な財源，天下一流の武芸者の指導，加ふるに当藩の青年武士の善き素質，この三要素がそろって」（石橋和男：前掲書，p.12-13）尚武の気風が確立されたと述べ，裕福な財源は実収石高の高さと，木蠟の収入を上げている。しかし，当時の久留米

藩は享保13年（1728）と宝暦4年（1754）に増税と飢饉に起因した一揆が起っており，また5年に1度筑後川が氾濫を起し，藩財政は宝暦頃から収支不足し天保期に入ると財政的窮乏は深まった。このため茶・紙・蠟・藍の生産奨励がなされた。ちなみに櫛の植立が始まったのは寛保元年（1741）である。（久留米市史編さん委員会：目で見える久留米の歴史，久留米，1981，pp.106-122）また青年武士の善き素質の根拠については述べられていない。

- 11) 杉本寿恵男：明善校90年史，明善校90年史刊行会，久留米，1980，pp.492-532.
- 12) 吉永正春：筑後戦国史，葦書房，福岡，1983，p.95，p.68.